



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

年間第12主日 A年(2023年6月25日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：エレミヤ書 20章10—13節

第二朗読：ローマの信徒への手紙 5章12—15節

福音朗読：マタイによる福音書 10章26—33節

「^{おそ}恐れ」から「^{めぐ}恵み」へ

今日の福音朗読には「恐れるな」が三度登場します。特に28節と31節は、直訳すると「恐れているのをやめなさい」となります(フランシスコ会訳は「恐れることはない」)。

26節でイエスさまが「恐れてはならない」とおっしゃるのは「^{おお}覆われているもので^{あらわ}現されないものではなく、^{かく}隠されているもので^す知られずに済むものはない」からです。

「覆われている」はギリシア語でカリュプトーといいますが、「何かが何かを覆う」という意味です。弟子たちが宣べ伝えなければならない福音は、人々にとって「覆われているもの」、「隠されているもの」です。ですから、イエスさまがそうであるように、弟子たちもまた福音を宣べ伝える時に^{はくがい}迫害にさらされます。なぜなら、福音は覆われて、隠されているからこそ、人々の耳には心地よいことばではないからです。神のことばを伝えながらも人々に^{きょうはく}強迫される第一朗読の^{よげんしゃ}預言者エレミヤの^{きょうぐう}境遇と同じです。

しかし、「覆われているもので現されないものはない」とイエスさまは言います。「現される」は、カリュプトーに^{ぶんり}分離を意味する接頭辞「アポ」が組み合わされたアポカリュプトーが使われています。「つまびらかになる」という意味と理解してよいでしょう。いつか、^{りかい}教えの^{おし}正しさがつまびらかになる日がやってくるから恐れてはならない、とイエスさまは^{すす}勧めるのです。これからイエスさまに^{めい}命じられて^{まちか}宣教活動に出かける弟子たちにとって、^{せま}間近に迫る^{たいしやう}迫害は恐れの対象でした。未来への^う恐れに^か打ち勝ってイエスさまは「^{あきら}明るみで言いなさい。……^{あきら}屋根の上で言いなさい」と勧めます。

28節の「恐れるな」は現在への恐れです。「体を殺^{ころ}す^{もの}者を恐れるのをやめなさいとイエスさまは命じます。むしろ弟子たちが恐れなければならないのはいのちの支配者で、「魂も体も地獄^{ほろ}滅ぼすことのできる方」である神さまです。神はいのちをつかさどるのです。

29節にも注目してください。「二羽の雀が一アサリオンで売られている」とあります。現代もそうですが、イエスさまの時代も雀はガリラヤではありふれた鳥でした。イエスさまの時代には、雀は食物として食べられていたそうです。動物性のタンパク^{げん}源としては安価^{あんか}で、庶民にとっては身近^{みぢか}な食べ物だったそうです。アサリオンはローマの少額通貨だそうで、1アサリオンは当時の一日の賃金1デナリオンの16分の1にあたるそうです。2アサリオンで一日分のパンが買えたそうです。一羽ではもうけが少なく、売り物にならないから二羽ずつ売っていたのでしょう。

29節の後半の翻訳^{ほんやく}はいくつかあるようです。「しかし、その一羽さえ、あなた方の父の許^{ゆる}しがなければ、地に落ちることはない」(フランシスコ会訳)。岩波書店の翻訳は「しかしそのうちの一羽すらも、あなたたちの父なしに地上に落ちることはない」となっており、ギリシア語原文に近いです。佐藤研先生はこの箇所を注釈し、「すなわち、地に落ちる時には神が支えつつ、共に落ちてくれる、の意^い」としています。少し考えさせられる解釈であり、翻訳です。

説教：「恐れ」から「恵み」へ

第一朗読で、預言者エレミヤのころはゆれ動^{うご}いているようです。一方で、彼には「恐れ」がありました。周りの人々の無理解と攻撃への恐れです。他方で、主なる神が共にいてくださるという「安心」もありました。恐れと安心の中でエレミヤは葛藤^{かつとう}しているようです。最終的に、「お任せします」(エレ20章12節)と神にすべてを委^{ゆだ}ねます。

第二朗読では、人間が抱く死への「恐れ」という罪^{つみ}に焦点^{しやうてん}が当たります。アダムの罪に始まって、人間は罪^{おか}を犯します。罪は死をもたらします。死への「恐れ」は人間を支配^{しはい}しています。しかし、「恵みは罪とは比較^{ひかく}になりません」(ロマ5章15節参照)。イエス・キリストを通じて、恵みが「多くの人に豊かに注^{ゆた}がれるのです」(15節)。

福音朗読では、「人々を恐れてはならない」(マタ10章26節)とイエスさまは呼びかけます。なぜなら「あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている」(31節)からです。「人々」とはイエスさまに敵対^{てきたい}する人たちのことです。「人々」に対して恐れを抱^{いだ}いていると、イエスさまの仲間であると正直には話せません。しかし、本当に恐れるべきは神さまです。しかし、その神さまは「髪の毛までも一本残らず数え^{のこ かぞ}ておられる、そんな神さまです(30節)。神さまに信頼^{しんらい}し、敵対する人々に対して堂々とイエスさまの仲間であると表明できたとき、「恐れ」から解放^{かいほう}され、「恵み」を生きようになるのです。